

2020 年度 第 5 回講演会 記録

日 時	2020 年 12 月 12 日 13 : 00～16 : 00
会 場	此花会館梅香殿から ZOOM でオンライン配信
講 師	北海道大学大学院 文学研究院教授 小田博志先生
演 題	いのちの網の目の人類学
備 考	受講者 162 名（会場 70 オンライン 92 名） 記録 飯田正恒

はじめに

【田中 克 先生】

小田博志先生に初めてお目にかかりましたのは、岩手県一関市室根町の矢越山において、毎年 6 月の第 1 日曜日に開催されています「森は海の恋人」植樹祭の会場でした。植樹祭の後に、「森は海の恋人」発祥の地、気仙沼舞根湾に 2014 年 4 月に発足した舞根森里海研究所で開催されます大懇親会の場で、いろいろな話をさせていただく中で、ぜひ地球環境自然学講座に置いて講演をお願いしなければとの思いに至りました。

本日の講演題目「いのちの網の目」は本講座の 2015 年度からの基本テーマ「森里海のつながりーいのちの循環」に深くかかわるものと予感しています。「森里海連環学」と「いのちの網の目の人類学」がどのようにかかわるのか、興味津々です。小田先生よろしく願いいたします。

【小田 博志 先生】

新型コロナウイルスは自然からの声

新型コロナウイルスによる感染拡大が世界的な問題となり、いまだ収束の兆が見えません。人間による森林破壊で野生動物と共生してきたウイルスが人に感染する機会が増大し、また宿主となるコウモリやネズミなどの動物の生息域が気候変動により拡大し、感染した人のグローバルな移動でパンデミックに至ったと考えられます。COVID-19 のような人獣共通感染症の発生を防ぐには、違法な野生動物取引と生態系の破壊を止める必要があります。この事態は、経済成長を追い求めて来た人間に対する自然からの警鐘であると思っています。



人類と自然の分離から始まった

近代になって人類が「自然」をモノのように客体化し、所有し、利用することが進歩であり、成長であるかのように考えられてきました。その結果、物質的な豊かさは得たかも知れないが、自然は汚され、壊され、新型コロナウイルスによるパンデミックが起り、子ども、孫たちが生き残れないような地球になってきています。この状況のまま放置することは、世代間倫理として許されず、考え直し、改める必要があります。このような状況に至った根本的な問題として、「人間と自然は違うもの」という誤った認識があると考えます。

今日考えたい問い

私たちホモサピエンス（知恵のある人の意味）は約 20 万年前に地球に現れました。その名の通り、知恵があるのなら、それをどのように発揮すれば、私たちが長い年月関わりあってきた自然の中に戻るができるのか、本日は短い時間ではありますが、皆さんと共に考えてみたいと思っています。

記録者からお願い：2 ページ以降の記録は、小田博志先生講演要旨を参照してお読みください。

なお、項目名に続く記載（例：p1 ③）は、レジュメ 1 ページの 3 番目のマス目記載資料を指しています。

【講演要旨】

1. 科学の現場から(p.1 ⑥、p.2 ①)

講演前半は、科学の新しい流れを紹介します。

今年3月、カナダ・バンクーバー市に立ち寄りました。この街には豊かな森があり、穏やかな海があり、住むならばここ！という印象を抱かせるすてきな街です。

先住民族が暮らし慣らして来た土地だけに、恵まれた環境があります。この街にあるブリティッシュ・コロンビア大学で新しい科学の研究が生まれつつあります



森林生態学を専攻するスザンヌ・シマード教授(写真右上)は、TED という講演会で「木々はいかに話し合うのか」の演題で、非常に興味深い刺激的なお話をされました。彼女の研究ポイントは、これまでの進化論的な植物学や生態学が、生き物は互いに生存競争を繰り広げているという前提で、森の木々は生存競争に勝って生き残るために、枝を張り巡らして日光を他の木に奪われないようにしたり、養分を奪い取ったりしているというイメージで語られてきましたが、実はそればかりではなく、木の根っこに微生物が共生しており、これを菌根とか菌糸と言いますが、木々はその微生物を介して、お互いに栄養分や情報を交わし合っている、つまり木と木は共存するための対話をしていることが、科学的に明らかになってきたということです。これは同一種の植物間に止まらず、異種間でも同様のことが行なわれているとのこと。森のなかで特に重要なマザーツリーは、根っこで自分の子どもを感じ取り、自分の子どもがよく育つようにケアをしている。森は、樹木が生存競争をする殺伐とした世界ではなく、その中の木々がお互いに語り合い、ケアし合い、つながり合っていて、ひとつの生き物のように活動していることが明らかになったことを紹介されました。

この内容は日本語字幕付きでYouTube で公開されています。下記 URL からぜひ視聴して下さい。

<https://www.youtube.com/watch?v=Un2yBgIAxYs>

シマード教授はお話し上手でとても分かりやすく、ご自分の経験、人生の物語と研究の成果をつなぎ併せながら興味深く講演されました。2021年には著書『FINDING THE MOTHER TREE (マザーツリーを探して)』を刊行されています。

2. あなたは生態系？(p.2 ②)

私たち自身の身体に注目してみます。“腸内フローラ”という言葉聞いたことがありますか？“腸内フローラ”とはヒトに棲みつく腸内細菌のことで、その種類は1,000種類以上、数にすると100兆個にもなると言われています。顕微鏡で腸の中を覗くと、まるで植物が群生している「お花畑(flora)」のようにみえることからこの名で呼ばれます。腸内細菌は種類ごとにテリトリーを保って棲んでおり、全体として集団を形成し、この集団を腸内フローラあるいは腸内細菌叢と言います。しばらく前に腸内フローラ特集番組をNHKスペシャルで放映しましたが、興味深い内容でした。

私たちの身体は、卵子の中に精子が入り受精すると受精卵が成長(=細胞分裂)し始めます。細胞分裂を繰り返すことにより、30数兆個の体細胞が出来、人体が成り立っています。ヒトの人体はDNAによって設計され、DNAの情報によりコントロールされているイメージがありますが、実はそうではないことが分かってきました。DNAが人間をコントロールしているのではなく、腸など体内でヒトと共生する、体細胞の数倍から数10倍とも推定される膨大な数の多様な微生物が、人間の健康だけでなく精神状態にも影響を与えていることが明らかになってきたということです。ヒトは多様な微生物(細菌)との共生体であり、ヒト自体がすでに生態系なのです。

3. 微生物が媒介する生きとし生けるもののネットワーク (p.2 ③)

人体と共生している微生物は一個々々が、シマード教授が説く森の木々は一本一本が、別々に活動するのではなく、お互いにつながり合って活動しているのです。

人体内には膨大な数の微生物が棲んでいます。それらはどこからきたのか。まず赤ちゃんが胎盤から出る(出産)過程で母体から取り込まれます。母親の持つ微生物は普段の生活の中で、例えば土と触れ合う、あるいは他の生物との接触で取り込みます。人も植物も、生きとし生けるものは微生物を媒介し、壮大なネットワークの中で生きているのです。このような生き物同士のつながりの世界が、研究成果として次第に明らかになってきました。

4. 「森里海連環学」に微生物の視点を加えると何が見えてくるのでしょうか? (p.2 ④)

微生物とのつながりが森の中に、また人のコミュニティーの中にあり、海にも膨大な微生物が棲息しています。大気中にも存在し、微生物の働きによって雨が降ることが大気微生物研究で分かっています。微生物の働きが解明できたのはほんのごく一部で、未知の部分が多く、私たちは微生物が形成している大海原によく浮かんでいる島のような存在でしかないのです。目に見えない微細な生物があらゆる場面で重要な役割を果たしていることが、最近の研究で次第に明らかになって来ています。森里海連環の中で微生物が果たしている役割は非常に興味深いテーマではないでしょうか。

5. 先住民族の視点 indigenous perspective (p.2 ⑤)

このテーマは私が専攻する文化人類学の王道というべきものです。

日本の先住民族は?と問われるとどう答えますか? はい、アイヌがそうですね。先住民族の人々は、強大な力を持つ国や為政者に土地や資源、暮らしや文化を奪われ、また謂れなき差別など、様々な迫害を受け非常に苦勞を背負ってきた歴史があります。しかし彼等は、民族として長い歴史と豊富な経験から今後の地球の進路を照らすことができる知恵や技を受け継いできている人達です。

私は北海道に20年暮らし、アイヌ民族からその自然との関わり方について多くのことを学びました。アイヌの人々が和人と共に森林の再生に取り組んでいる地域があります。北海道沙流郡平取町二風谷です。長老の故貝澤 正さんは「川が荒れるのは山が荒れているからで、治水と治山は一体のものだ。針葉樹ばかりになってしまった山を元の広葉樹の山に戻し、その木を使って昔のように彫り物細工や船が作れるよう、山を再生する」ことに取り組み、息子の貝澤 耕一さんが父・正さんの遺志を継ぎ、NPO 法人ナショナルトラスト・チコロナイを立ち上げました。

アイヌ民族がかつてその恵みを受けて暮らしていた自然の森を再生・保全して後世に継ぎ、自然と人間の関わりやアイヌ文化を学ぶと共に、環境の保全を目的とする有意義な活動が行われ、私もこの活動に関わっています。詳しい活動内容はHPで確認下さい。 URL: <https://blog.goo.ne.jp/cikornay>

伝統的な生態学的知識

先住民族は、先人が長い時の流れのなかで自然と関わりながら培って来た、世代から世代へと受け継がれて来た知識と知恵を活かして暮らしてきました。この知識を「Traditional Ecological Knowledge (TEK: 伝統的な生態学的知識)」と言います。これを科学が後追いして検証し、先住民族の経験にもとづく知識と知恵が道理に適ったものとして科学的に評価されることがしばしばあります。

シリコロカムイ

「木」をアイヌ語で何というかご存知ですか？ 「シリコロカムイ」と言います。「シリ」は大地を意味し、「コロ」は守る、「カムイ」は神です。「木」は大地を守る神様なのです。つまり「木」は根っこで地を固め、雨が降っても山が崩れることなく、村を守ってくれる「木」をアイヌの人たちは尊敬の念を込め「シリコロカムイ」と名付けました。私が山菜取りに山に行き斜面を登っていると、木が生えているところは地面がしっかりしているので滑り落ちる恐れがなく、安全で歩きやすいのです。このように大地は木によって確かになっていることを、私自身実感しています。

6. 人類学の新しい潮流（p.2 ⑥）

現在人類学は、人類の身体形質を主対象として主に自然科学的観点から「ヒト」を探究する自然人類学と、人類の文化・社会を主な対象とし、主に人文科学的観点から「人間」を探究する文化人類学とに大別されています。近年、自然と文化を分けて人類を研究すること自体が疑問視されるようになり、研究の枠組みが問い直されようになってきました。

近代の人類学は、文化と自然を分けて研究してきましたが、本来文化と自然は分かち難い関係にあります。地球の生き物の一つとして人類も自然の中で生かされてきました。したがって自然と文化を分けて個別に研究するのではなく、両者を一つにした人類学を目指す流れが現れてきました。

この地球にいるかぎり人類も樹木、霊長類、魚類など他の生物と同列の存在であり、人類が好き勝手に他の生き物を利用し、支配する人類中心主義、英語では anthropocentrism といいますが、これを止めるべきではないかという主張がされるようになってきました。人類だけの人類学ではなく、他の生き物との関係をみていく「マルチスピーシーズ人類学」という新しい人類学が提唱されています。人類という種だけしか見ない人類学ではなく、多種との関係性の中で人類を見ることの大切さが問われるようになりました。

「生類（しょうるい）」という言葉があります。九州・水俣病患者の世界をテーマにした『苦海浄土』の作者・石牟礼道子さんは、いのちあるものすべてを「生類（しょうるい）」と呼び、チッソという企業が、有機水銀を工場排水として海に放出し、多くの動物や人のいのちを奪ったこの事件は、人類による生類の命に対する冒涇であると考え、「いのち」とは何かを問い続けた作家です。

人類は人類だけで生きているのではないので、私は「文化人類学」を「生類学」という名称に改めてはどうかと思っています。自然といっても人間と切りはなされたモノの集合体のような自然ではなく、それはいのちある自然で、田中克先生が鋭敏に感じ取られた「いのち」という和語は「生きているちから」を意味しています。勢いのある、動きのある、生きている自然、自然科学の客体としての自然ではなく、生きている主体としての自然であることが大切なことであり、その中で生かされている生類としての人類という関係になります。

7. 先住民族の「自然と人間をつなぎ合わせる思想、言葉」

先住民族の世界を「遠く離れた所にいる、伝統的な衣装を着て歌ったり、踊ったりしている物珍しい文化」と捉えるのではなく、自分たちが引き起こし対策に行き詰まっている気候変動や地球温暖化などに対し、「今後の新しい世界のあり様をその経験と知恵に学ばせていただく姿勢」で先住民族の人々と関わることを求められるようになってきました。これから先住民族の「自然と人間をつなぎ合わせる思想と言葉」を紹介します。

(1) 鮭が森をつくる salmon makes forest. (p.3 ①)

これはアラスカの先住民族の言葉です。レジュメに掲載した写真は数年前にアラスカの南東部にあるシトカという町で撮影したものです。先住民族の知り合いにあちこち案内してもらい、しばらく滞在しました。

皆さんはアラスカにどのようなイメージをお持ちですか？ オーロラ、雪で覆われた大雪原などでしょうか。シトカはバンクーバーからハイダ・グワイを経由しさらに北上したところにあります。海流の影響で比較的暖かく、雪は北海道より少ないそうです。雨が多く、海岸近くまで豊かな森が迫っています。サケは川で孵化すると外洋に出て回遊して栄養を蓄え、生まれ故郷の川に戻って産卵し、その死骸は川辺の森に栄養を与える。サケは栄養循環の中で重要な役割を果たし、豊かな森が作られています、その認識を salmon makes forest. とシンプルな表現で言い表しています。

(2) We are one 私たちはひとつ (p.3 ②)

シマード教授が、カナダのコーストセイリッシュ族の言葉を紹介しています。シマード教授はネイチャー誌に論文が掲載される一流の科学者ですが、私は彼女の謙虚さに感銘を受けました。

コーストセイリッシュ族の言葉

『人間同士お互いにつながっている。人間は他の生類、すなわち森、海、海の生き物、川、クマ、サケ等とつながり合っており、スピリット、つまり心とか魂とか生命力はこれらの存在に共通のものである。近代的な科学だけが優れているというのではなく、先住民のコーストセイリッシュ族の人々は深い意味で科学的である。1 万年以上もの間、彼らは科学的であったからこそ、この環境で生き続けることができた。彼らの知恵を端的に表した言葉が “We are one ” (私たちはひとつ) である。』

“We” は人間だけでなく、自然界に生きとし生けるもの全てを指しています。コーストセイリッシュ族は 1 万年以上暮らしを続けることができた、今流行りの言葉でいえばサスティナビリティ＝持続可能性」をこれだけの長い間実現できたのは、“We are one” の生活をしてきたからなのです。一方、一見豊かなようですが、将来世代の生存を危機に陥れるような近代社会の持続不可能性と比較し、どちらが科学的で知恵があると言えるでしょうか。

(3) ミタクエオヤシン 私につながる全てのもの (p.3 ③)

北米ラコタ族、スー族とも呼ばれるアメリカインディアンの人々の言葉です。ラコタの人々の所へ毎年のように出向き、彼らと活動を共にした立教大学アメリカ研究所の阿部珠理先生(注)が著書『聖なる木の下へ』で紹介されています。コーストセイリッシュ族の “We are one ” と同じ思想です。ラコタの人々のスピーチは必ず「ミタクエオヤシン」で終わるのだそうです。

(注) 阿部珠理：日本におけるアメリカ先住民研究の第一人者であり、サウスダコタ州の保留地で 20 数年来フィールドワークを続け、現地の人々と深く交わった。立教大学アメリカ研究所所長 (1999 年 - 2003 年、2008 年 - 2012 年)
公益財団法人アメリカ研究振興会評議員ほか

8. アンデスのサルワ村 (p.3 ④)**段々畑**

昨年念願叶い、南米アンデス山脈・インカ帝国のクスコ、マチュ・ピチュ、チチカカ湖を旅行しました。さらに現地の知り合いの案内で、アンデス先住民族が暮らすサルワ村も訪問しました。因みに“アンデス”という言葉はケチュア語の“アンデーネス”が語源で、天まで届く段々畑の意だそうです。

先住民族と言えば狩猟・採集の民のイメージが浮かびますが、近年先住民族の農耕が注目されています。因みにアイヌの農耕は、明治時代に和人に強制されて始められたと言われてきましたが、江戸時代の遺跡の発掘調査でかなり高度な畑作を行っていたことが明らかになっています。

アンデスの人々は古代から畑を耕し作物を作ってきた農の大先達です。ジャガイモ、トウモロコシ、トマト、トウガラシ、カボチャなど、野生種を栽培種に改良し、これをスペイン人がヨーロッパに持ち帰ったことで、世界に広まったのです。標高約 3000 メートルの地にあるその村の畑では主にジャガイモやトウモロコシを栽培し、1 年で 2 年分の食糧の収穫があるので備蓄ができ、食べることに困らないと言っていました。経済的な指標である GDP で見れば、アンデスの村は「貧しい」のようですが、彼等の大地には水と太陽の恵みがあり、種子を代々受け継いで育てることではほぼ自給自足の生活ができます。トウモロコシは豆類やカボチャ、ウリなどと混合栽培していました。衣服や家も自分たちで作り、お金がかかりません。この先どうなるのだろうとの不安感のない、貧しいどころか土地に根差した豊かで安心感のある生活を送っています。

(1) アイユ ayllu (p.3 ⑤)

そのようなアンデス先住民族の言葉の中に、先程紹介した先住民族の知恵と相通ずる言葉があり、その一つが「アイユ ayllu」です。これは「村」の意味ですが、村の中の人間だけでなく、植物、動物、山、川、雨などまで含むあらゆる生き物の共同体を意味した言葉です。

(2) アイワイ uyway (p.3 ⑥)

共同体がどのように関わっているかを表わす言葉で、日本語ではケアし合う、あるいは育み合うと言った意味です。人は自分の子どもや孫などの世話をしますが、アンデスの人々のケアの対象は人間だけでなく、世界に存在する全てのものに及びます。パチャママとは大地の神様のことですが、農作業を始めるとき、まずパチャママにトウモロコシのお酒を注いで捧げることから始まります。山をアプと言いますが、それぞれのアプには役割があります。サルワ村の牛、ヒツジ、ヤギなどを飼っている農家は、年に一度山に登り家畜を守る神様に祈りを捧げます。パチャママやアプと人間は互いにケアし合う関係の中で結ばれているのです。

関西の人たちは大峰山や三輪山を神聖な山として敬っていらっしゃると思いますが、それはアンデスの先住民族の山（アプ）との関わりと共通しているのではないのでしょうか。日本の「供養」と「アイワイ」とは相通ずるように感じます。

9. アマゾン (p.4 ①)

アンデス山脈は大西洋からの湿った大気を受けとめて雲が湧き、雨となってアマゾンに降り注ぎ、熱帯雨林を造ります。アマゾンの先住民族・カヤポ族酋長のラオーニ (Raoni Metuktire) さんは今年のノーベル平和賞の候補になった人です。1989 年 5 月、イギリスのロック歌手スティングは、ラオーニさんと共に、『アマゾンを守ろう』というスローガンを掲げ、ワールド・キャンペーン・ツアーを行ないました。この一行が来日した時、ボランティアとして南研子さん(注)がお手伝いしたことが縁で、南さんはアマゾンの熱帯雨林の保護活動を始め、NGO 熱帯森林保護団体 (RFJ) を立ち上げました。アマゾンの現地でスタッフと共に先住民と関わりながら対等の立場で彼等の願いを聞き、アマゾンの森や動物たちを守る活動を行っています。

現在のブラジルの大統領は開発至上主義者のようです。開拓者が森に火を放つと、もはやそこは原生林ではなくなるので開発の許可が下りるとのこと。故にアマゾン熱帯雨林は放火が原因の大火災が絶えず、森林破壊が進んでいます。そこで生産された牛や鶏、大豆は日本に輸出されていますから、アマゾンの破壊と日本人の生活は無関係ではありません。アマゾンの熱帯雨林がこれ以上破壊されないように、ラオー

ニさんが世界に向けて発したメッセージを南研子さんは著書『アマゾン 森の精霊からの声』（ほんの木）で紹介しています。

ラオーニの言葉（p.4 ②）

『人間はちっとも偉くない。森や川、空や大地の声に耳を傾けよ。その全部に精霊が宿り、沢山のことを教えてくれて、それに従う。人間の都合だけで判断することは間違っている。お前たちの社会は目先のこ
としか考えず、目に見えるものしか信じない。森がなくなれば、インディオも死ぬ。でもお前たちも滅びる
ことを忘れてはならない』

（注）南研子：1970 年女子美術大学油絵科卒。卒業後 NHK テレビ「ひょっこりひょうたん島」などの製作を担当。
コンサート・プロデューサー。1989 年「熱帯森林保護団体」設立し代表として活動中。
NGO 熱帯森林保護団体（RFJ） <https://rainforestjp.com/>

10. オーストラリア

（1）キンバリー・フィッツロイ川（p.4 ③）

オーストラリア北西部キンバリーにあるこの川は、ダムや護岸工事など人の手が加えられていない自然
そのままの川です。クロコダイルがいるそうです。

（2）大地は、世界は生きている（p.4 ④）アボリジニ・ジミー爺さんの言葉

オーストラリアの先住民族を日本では“アボリジニ”と呼びますが、実は多様な言語を話す複数の集団
の総称です。近年現地では「ファーストネーション」と呼ぶようになっています。この人たちもまた「生き
ているのは人間だけでなく、大地も世界も生きている」と考え、これに沿った生き方をしてきました。
アボリジニの歴史を研究した保苅実さん（注）は『ラディカル・オーラル・ヒストリー』という極めて興味
深い本を著しています。彼は人類学者ではありませんが、アボリジニのカントリーで彼等と暮らしながら
彼等の話しに耳を傾けてその著書に纏めました。以下はカントリーの長老ジミー・マンガヤリから保苅
さんが学んだことです。

「最も重要なのは、この大地もまた生きているという点である。これはジミー・マンガヤリが私にくり返
し強調した点だった。ジミーじいさんは、手で土をすくうとそれを私に見せ、「君はこれを土だと思っ
うがこれは人なんだ」と念を押すように語った。」（保苅 2004 : 61）

「世界は生命で満ち溢れているだけではない。すべての生命ある存在は、生きた大地からやってくる。
この意味で、「世界それ自体が生きている」ということもできるだろう。」（保苅 2004 : 62）

（注）保苅 実：一橋大学卒業後 1999～2003 まで、オーストラリア国立大学太平洋・アジア研究所（人類学科、歴史学科）、
人文学研究所に客員研究員として、2002 年からは日本学術振興会特別研究員として慶応義塾大学に所属。研究領域は
オーストラリア先住民族、少数民族、多文化主義、オーラルヒストリー、歴史人類学等。
2004 年 5 月、メルボルンにて病没。（お茶の水書房『ラディカル・オーラル・ヒストリー』著者紹介から抜粋）

11. 新しい科学と先住民族の知恵が会うところ

シマード教授らが提唱する新しい科学と、先住民族が培ってきた知恵の間には共通するものがあるように
感じています。これを、生きとし生けるものは互いにつながり合っており、「いのちの網の目」のようである
と言い表すことができるでしょう。いのちは個別に存在するのではなく、互いに網の目としてつながり合っ
ていて、その中で個々の生き物が生きている。さらに言えば「いのちの網の目」こそ生きものの本体であり、
人が生きていることもこれから離れることはない。このことをカナダのコーストセイリッシュ族は”We are
one”と言い、アボリジニは「生きている世界」というのです。この「いのちの網の目」の思想を後半では深
めていきたいと思います。

【コーヒープレーク】

前半は森林研究、微生物研究の新しい流れ、微生物を介して様々な生き物がつながりあっていることのお話をしました。さらに世界中の先住民族が受けついできた知恵のなかで、生きとし生けるものが関わり合い、つながり合い、ケアし合っている。そのなかで私たち個々の生き物が生きている。このことを「いのちの網の目」と言い表すことができそうだということをお話しました。

後半はもう少し基本的なことに立ち還りながら、「いのちの網の目」とは何か、皆さんと一緒に考えて見たいと思います。

私は香川県の生まれで、生家は四国 88 カ所巡りの遍路道沿いにあります。子どものころ、お遍路さんが玄関先に立つと、祖母がお布施をあげていた記憶があります。これをお接待といいます。四国ではこうした慣習が今も続いています。大学入学のため上阪し、最初に住んだのはこの会場のある西九条でした。京都大学の精神医学者の木村敏先生に大変お世話になり、そのご縁で木村先生が留学されたドイツのハイデルベルクという美しい街に留学しました。関西に来て初めて登ったのは大峰山山上ヶ岳で、大阪都心に近いところにありながら豊かで奥深い自然が残っていることに魅力を感じていましたが、空海は紀伊半島の山中にある・高野山に修行の道場を設けたのです。

1 2. 生きているということに立ち還る (p.4 ⑥、)

生きていることは私たちには当たり前のことですが、立ち止まって考えてみると奥深いものがあり、そこから様々な思想や科学研究が発展する基盤のようなものです。生きていることの特徴は何か、改めて考えてみましょう。

(1) 生きものの特徴

1) 自発性

私たちは生きものなので、自ずから動き、成長し、変化します。この「自（おの）ずから」という言葉は含蓄の深い言葉です。もともと日本語に「自然」という名詞はありませんでした。「自然」という文字は、本来は“じねん”と読み、その意味は、他に原因がなく、自ずから生成展開していくことを表わす形容動詞、あるいは副詞として用いました。明治になり西洋語の“nature”を、人間を除く世界の全てを表わす言葉として、既にあった“じねん”を“しぜん”と読み替えて使ったのが「自然＝しぜん」です。自然科学の「自然」という用語にはこのような背景があり、実は特殊な意味をはらんでいるのです。自然科学がもたらしたものは大きいですが、客観的な測定にのみ捉われると、生きものが自ずから動いて生成し変化する「自発性」を捉えることができなくなります。

2) 多様性

今日の講演会には多くの方に参加いただきました。皆さん一人一人容姿が異なり、経歴も多様です。樹木など自然界の生きものも名称は同じでもその姿、形状をみると一つとして同じものはありません。一方、工業製品は規格どおりに画一的に製造され、同じものが出来上がります。生きものはそうではなく自ずと異なっていきます。同じ両親から生まれた子どもは、顔つきや性格は似通ってはいても一人一人異なり個性的であり、多様化します。

3) 関係性

このように多様な生きものが相互に関わり合っており、この「関係性」の中に生きもののいのちがあります。自発性、多様性、関係性の3つの特徴を持っているのが生き物です。その中でも根本的に大事なのが「自発性」です。

1 3. いのちの自発性 (p.5 ③)

人が生きていくうえで守らねばならない社会の決めごとが多くあり、自発的に生きにくいことが往々にしてありますが、「自発性」は、このような社会制度の中でも元気に、健康に生きるためのキーワードです。その具体例を紹介します。

(1) 野口晴哉 (のぐち はるちか) と整体 (p.5 ④)

「整体」という用語は、野口晴哉による整体療法（野口整体）が有名になったことで、知られるようになりました。人間のからだは常に自発的に動いています。息をする、あくびをする、かゆいところをかくなど、無意識に私たちは行っています。裡（うち）なる動きにすなおに生きると、からだはおのずと整っていくと野口は考え、自発的な動きを「活元運動」と称しました。このようないのちの自発性に基づく「野口整体」に私は注目し、思想的にも重要なものだと思っています。

(2) 渡辺位 (たかし) と不登校の子どもたち (p.5 ⑤)

渡辺位先生は児童精神科医として、国立精神・神経センター国府台病院に長年勤務され、児童精神科医長をつとめられました。渡辺先生は不登校の子を異常視せず、人間を画一化するような学校へ子どもを通わせるのではなく、行きたくないと思う方が正常なのだという考えかたをする型破りな児童精神科医でした。その子がその子のままであることを肯定することは本人にとって大きな力になり、いのちがよみがえることにつながります。子どもの自発性を感じ取り、抑え込んだり無理強いせず、「あなたはあなたの中にいいものを持っているのだから、それを発揮するとあなたらしくなり、幸せになりますよ」という方針で子どもと接してこられました。渡辺先生は子ども達が自発的に生きる力の大切さを訴え、促し、子どもを支えた医師です。私も渡辺先生を見倣い、学生には「自発性」を大切にしたい指導をしています。結果予想もしないような力を発揮し優れた研究成果を上げることを経験しています。

(3) 木村秋則と自然栽培 (p.5 ⑥)

青森県のリンゴ栽培農家・木村秋則さんは、農薬を散布するとリンゴの木や人に悪影響が出て、特に妻が農薬散布した夜は寝られないくらい身体が腫れ、しばらく寝込むような状態になるのでこれではやっていると、農薬を使用しないことを決意しました。しかし、農薬を使用することを前提に品種改良したリンゴ（フジ、紅玉など）は全く育たなくなり、6年間というものが花が咲かず実もつけないという状況になりました。そうした苦難の時期に、岩木山中のどんぐりの木は全く人が世話をしないのに生き生きしていることに気づきます。木村さんは、その答えは土にあると直感し、リンゴ畑の土を山の土に近づけるため、雑草や昆虫と共存する環境を再現します。多様な生きものが関わり合い、支え合う畑の中でリンゴの木も生命力を取り戻し、無農薬栽培に成功したのです。木村さんは「主人公はリンゴの木で、私はリンゴが育ちやすいような環境のお手伝いしているだけです」と言います。リンゴの木が自発的に根っこを伸ばし、菌根菌、菌糸の力により、地中から栄養を吸収し、逆にリンゴの木は菌糸に養分を供給する関係性の中で、リンゴの木が元気になり、育ち、花を咲かせ、実が実るのであって、人間がリンゴを実らせることはできないと考えるのです。

私は「作物」という言葉はおこがましい言葉だと思っています。3年前に札幌近郊に畑を借り、自分で耕し始めました。最初は、粘土質の赤土でしたが、3年かけてようやく土が黒く、柔らかくなってきました。ジャガイモ、トウモロコシ、サツマイモ、ダイズ、カブ、ニンジンなどが年々よく育つようになっていきます。土もまた生きものであることを実感しています。

いのちの自発性を前提とした関わり (p.6 ①)

以上の3つの事例からも分かるように、いのちには自発的に自らを形にしていく、根源的な力があります。人が思うようにコントロールするのではなく、相手が元々持っている裡なる力を尊重して関わったときに、相手は思わぬ力を発揮する。これがいのちの自発性です。

(4) 木村 敏 あいだ (p.6 ④、⑤)

いのちの自発性を前提に精神科の診療をされ、思想として紡ぎ出されたのが木村 敏先生です。木村先生は元京都大学医学部精神神経科の教授です。私が大阪大学の学生時代に木村先生の『あいだ』というシンプルなタイトルの本を読み、非常に感銘を受けました。特に「生命的自発性」について述べた文章は印象に残りました。

「生命的自発性の水圧がいっぱいにかかった水源から、個別的に分離した(「身」と呼ばれる)身体的存在の出口を通して迸り出る噴水のようなものを思い浮かべてみよう。一つひとつの噴出口の特徴にしたがってそれおれに異なった弧を描く水の曲線が、個々の自己だということになるだろう。

自己成立以前のメタノエシス的な水源には自己もなければ他者もない。なにもかもが渾然一体となった「おのずから」の動きが見られるだけである。」(木村 1988 : 205-6)

私は学生時代、木村先生に自分の論文を添えてお手紙を差し上げたところ、一学生の問い合わせにも関わらずきちんとお返事をいただきました。その後、京都大学に木村先生をお訪ねして以来、学恩を受けてきました。その木村先生と北海道浦河町にある「べてるの家」の人たちの対話が京都のお寺で行われ、その模様が動画になり YouTube で視聴できます。

<https://www.youtube.com/watch?v=5zPqxhtTbwU> 「木村 敏×べてる (濃縮版)」

「べてるの家」とは、北海道の浦河町にある精神障害の当事者による施設です。べてるの家の人たちは、木村先生は「当事者でもないのに自分たちのことを理解してくれている」と言っています。この映像の中で木村先生は次のように話されます。

「例えば、僕なら僕がここにこうやって生きている、このからだが生きているわけですけども。しかし何か大きないのちみたいなものが、あるように思うんですね。非常に大きな、自分が生きているなんていうことを包み込んでしまうような、**大きないのち**みたいなものがあると思いますよね。それが自分のからだの中に流れ込んできて、それで私のいのちになってるんだらうと思う。そのいのちをみんなで分かち合っている。それがさっき向谷地さんがおっしゃった生活者の仲間になるということだと思っただけですけども。」

ここで木村先生は、先住民族の例えば “We are one” と表現するのと共通する生命観を述べられていると思います。

14. いのちの網の目を捉える (p.6 ⑤、⑥)

いよいよ本日の最後のパートです。

他にコントロールされずに自ずから生き、互いに関わり合い、多様であること。このようないのちのあり様を「いのちの網の目」として表現してきました。近代の自然科学のように人と自然との分離を前提にすれば、このように隔てなくつながり合っている世界を適切に捉えられないということになります。自然科学の分野でも従来のような自然と人間の分離を前提としない潮流が現れています。それがスザンヌ・シマード教授の木々のネットワークを捉える森林生態学であり、田中克先生の「森里海連環学」ではないかと考えます。人と自然をつながりの中で捉えようとした先駆者にレイチェル・カーソンがいます。

(1) レイチェル・カーソン (p.7 ①)

彼女の著書『沈黙の春』は、世界を変えた本の1冊です。第2次世界大戦後のアメリカで開発された化学合成農薬は農作物の虫害を防ぐ一方、虫が絶滅すれば、それをエサとする鳥も滅び、鳥のさえずりの聞こえない「沈黙の春」が訪れると警鐘を鳴らしたのです。カーソンの指摘により、食物連鎖によって、生態系に悪影響を及ぼす農薬は規制されるようになりました。このような規制は米国だけでなく世界中に広がりを見せ、近年にまで続く環境保護思想の源流の一つになりました。

私たちが殺虫剤をニレの木に撒くと、次の春、コマドリは沈黙するだろう。それはコマドリに直接殺虫剤をかけたからではなく、毒がニレの葉っぱ一虫一コマドリと巡っていくからである。それはいのちの（あるいは死の）網の目を表しているのである。 レイチェル・カーソン『沈黙の春』

ここでカーソンも「web of Life=いのちの網の目」と言っているように、生きとし生けるものは互いにつながり合っているのです。人間が自然界に毒を撒いたり、破壊的な影響を与えたりすると、それは網の目を通して、必ず人間に戻ってきます。逆に自然界に益になることをすれば、それは人間のいのちにも良い結果となって返ってきます。

(2) 南方熊楠 (p.7 ②、③)

南方熊楠は、和歌山県が生んだ博物学の巨人です。東京の学生生活に飽き足らずアメリカ、イギリスに渡り英語で多くの論文を著しました。興味の対象は、粘菌をはじめとした生物学のほか人文科学等多方面にわたり、民俗学の分野でも柳田国男と並び重要な役割を果たしました。生涯在野で、熊野の自然保護にも力を注ぎました。縦割りの学問の中に閉じ籠ることなく、自由に諸分野を行き来しました。

彼はすでに明治時代に生態学（エコロジー）の重要性に注目し紹介した人です。明治新政府の神社合祀令により、鎮守の森の木の伐採が大量に無秩序に行われ、熊野の森が危機的な状況に追い込まれました。熊楠はこの森を守ろうと獅子奮迅の働きをし、ときには官憲ともやり合い、原生林に象徴される森羅万象が複雑に絡み合う自然の大切さを先駆的に訴えたのです。

「縁」というのは仏教的な言葉で、因果関係が複雑に働くことを言います。私たちは「不思議なご縁ですね」とか、「縁起がいい」とか言いますが、この「縁」について、熊楠は、多重に因果関係が重なり合い、絡まり合っているのが自然な状態であるが、この「縁」は近代科学では解明できないと言っています。熊楠は、京都梅ノ尾・高山寺（真言宗）住職・土宜 法龍（どき ほうりゅう:注）さんとの手紙のやり取りの中で次のように書いています。

「今日の科学は、因果は分かるが（もしくは分かるべき見込みはあるが）縁が分からぬ。しかしこの縁を研究するが我々の任なり。しかして、縁は因果と因果の錯雑して生ずるものなれば、諸因果総体の一層上の因果を求むるがわれわれの任なり。」

南方熊楠 1971「川村竹治宛書簡（明治 44 年 11 月 19 日）」『南方熊楠全集 第 7 巻』平凡社：526

（注）土宜 法龍（どき ほうりゅう、嘉永 7 年（1854 年）1 月 8 日 - 大正 12 年（1923 年）1 月 10 日）は、近代日本仏教史を代表する仏教学者、僧侶。

南方曼荼羅（p.7 ③）

この図は一見落書きのように見えますが「宇宙のあり方は単純な因果関係だけで解きほぐせるものではなく、様々なものが複雑に関わり合いながら動いている」ことをモデル化したものです。熊楠は自分が捉えている自然をこの曼荼羅のような図で表現したのです。社会学者・鶴見和子さんはこれを「南方曼荼羅」と言っています。

（3）空海が受け継いだ曼荼羅（p.7 ④） 金剛界曼荼羅、胎蔵曼荼羅

空海（弘法大師）が唐に留学し恵果和尚（注）から真言密教を継承します。恵果和尚は空海がはるばる日本からやってきてことをとても喜んだそうです。空海は四国讃岐の生まれです。奈良の久米寺で密教經典の大日経の存在を知りました。阿波・大瀧嶽や土佐・室戸岬などで求聞持法を行じ、宇宙と合一する体験をしました。空海が修行した室戸岬の洞窟に入って外を見ると、空と海がただ広がっています。空海の名はそこから来ているのではないかと考えられます。（右写真御厨人窟 室戸市 HP から）

（注）恵果和尚：えか/けいか、(746 - 806 年) は、中国唐代の密教僧で日本の空海の師。
長安の東にある昭応県（現在の臨潼）の出身。真言八祖の第七祖。



空海は自らの宇宙的な体験を解き明かすために模索を続ける中で、密教と出会い、それを正式に学ぶために遣唐使船に乗って都・長安に赴いたのではないのでしょうか。その真言密教の神髄を文字ではなく目で見える形で表わしたのが曼荼羅です。曼荼羅とは円満具足、すなわち円の中に宇宙を表わしたものであるというのが本来の意味です。

レジュメ p.7 の曼荼羅は右が胎蔵曼荼羅、左が金剛界曼荼羅で、真言密教では一対のものとして捉えられます。南方熊楠は胎蔵曼荼羅がより根本的なものと捉えていたようです。

胎蔵曼荼羅の中心にいる根源的な存在である大日如来から万物が展開する様を描き出しています。私たち人間も他の動物も、植物、虫、魚から塵、芥に至るまで全てあらゆる存在が、大日如来が形を変えて自らを表現したものです。このように根源的な自発性が自らを表現していくあり様を描いたのが曼荼羅なのです。曼荼羅は有難いもの、これを信ずれば救われるというのではなく、宇宙のあり様を直観して捉え、モデル化したものなのです。まず根源的な存在であるいのちそのもののような大日如来が、八名の菩薩と如来として形を表わし、さらに展開して外側になると仏教の菩薩とか如来ではなく、まことに奇怪な存在までもが描かれています。宇宙にある全てを包摂し、生きとし生けるものが関わりあって存在しているあり様を示したものが曼荼羅です。



高槻市・JT 生命誌研究館長 中村桂子さんは分子生物学的研究の末に、生命を表すものとして行き着いたのは曼荼羅であると言い、「生命誌曼荼羅」を JT 生命誌研究館に掲げています。曼荼羅は古いものではな

く、新しいものであり、根源的なものです。

2) 阿字本不生 あじほんぶしょう (p.7 ⑤)

真言密教の根本的な教理を「阿字本不生」と言います。それを短い時間の説明で分かっていただく無理を承知でお話します。

「阿字本不生」の「阿」とは、サンスクリット語の最初の音と文字である「ア」のことです。日本語も英語もその音から始まりますね。それは物事の初源を象徴します。「ア」は物事の本々の始まりであるがゆえに、それよりもさかのぼることはできません。他から生じることはなく、滅することもない。

「ア」は他から生じることのない本源であることを称して「阿字本不生」というのです。あらゆるものの根源である大日如来を象徴するのが「ア」です。「ア」から始まって、あらゆる言葉が出てくるように、大日如来が展開することで一切万物が現象していると観て取るのです。

3) 空海『即身成仏義』(p.7 ⑧)

空海の著『即身成仏義』は、読めば読むほどすごい内容であると思います。悟りを開いて仏陀になるまでに、旧来の仏教では未来永劫、人間が想像することができない程の年月を重ねなければならないとされていました。その中で空海は「いやそうではない、父と母の許に生まれたこの身をもって仏になることができる」と述べた本が『即身成仏義』です。「即身」の意味を空海はレジュメ p.7 に記載した「重々帝網 名即身（重々帝網なるを即身と名づく）」と説明しています。では「帝網」とは何か？ 帝釈天の住まう宮殿に網が張り巡らされています。その〈網の目〉には宝珠が付いていて、それら無数の宝珠は互いに互いを写し合っています。それと同様に、この身も宇宙から切り離されてあるのではなく、一切万物を照らし出している。あらゆるものとの関わりの中にこの身がある。このことが分かるのが「悟り」である。これを空海は「即身成仏」と表現したわけです。

空海のいう「帝網」の概念は「いのちの網の目」と同じものではないでしょうか。あらゆるものがお互いに網の目のようにつながり合い、動いている。それと不可分にこの身もある。この空海の世界には現代的な可能性があると、博物学者の南方熊楠も、生物学者の中村桂子氏も、また人類学者である私も考えています。

4) 空海の現代性 (p.8 ①)

空海が唐に渡るときに乗り込んだ遣唐使船は四艘一組でしたが、その内の一艘は沈み、空海の乗る船は波に流され南方の浜に漂着しました。現地人からは海賊と思われ警戒されたのですが、空海はその語学力を発揮して書いた文が銘文であることに現地の官吏が驚き、長安への道が開けたそうです。

このような苦難を経てまで空海が学び、独自に発展させた密教は、彼が大自然のまっただ中で得た体験を解き明かす〈言葉〉でした。それはいのちの根源的な自発性と多様性と関係性を捉えるモデルであり、そこには狭い意味での「宗教」思想を超えた現代的な意義があります。

おわりに

今日、皆さんと共に考えてきたことは、新型コロナウイルス・パンデミックの問題から始まり、いのちは互いに関わり合い、つながり合って生きている。そのことを現代の科学の新しい潮流、先住民族の知恵から照らし、「いのちの網の目」という言葉で表し、お話ししました。大事なことは、これからの将来世代、私たちの子孫が安心して平和に暮らしていける地球を引き継いでいくことです。気候危機などの問題の根底には人間と自然を切り離して、人間が自然をコントロールするという前提があります。人間と自然をどう

つなぎ直すのが根本的な問題だと言えるでしょう。そこで、先住民族の文化、南方熊楠の思想、空海の真言密教などを単に知的な興味で学ぶのではなく、いま私たちが直面している問題を解決する手がかりを読み取ることが求められます。その姿勢で向き合ったとき、人間もまた「いのちの網の目」の中で生かされているという実相が浮かび上がってきます。それは難解な思想でも最先端の科学理論でもなく、私たちが生きているということをありのままに表したもののなのです。この「いのちの網の目」という原点に立ち還り、これからの暮らし方、社会のあり方を構想し直し、つくり直していくこと。未来のための手がかりはもっとも身近なところにあるのだと思います。今日のお話がそのためのきっかけとなりましたら幸いです。

ご清聴ありがとうございました。(拍手)

【Q&A】

Q 1：アマゾンの森林破壊の原因は、先住民の焼畑と聞いていましたが、今日のお話からそうではなく無謀な開発によるものだということがよく分かりました。

A 1：今日の話しの大事なポイントです。先住民族は、アマゾンでも東南アジアでも長い年月焼畑農業で暮らしてきました。大切な食料資源を得る森ですので、万が一にも火災にならないよう焼く範囲を決め、類焼しないように防火体制を敷き、細心の注意を払って火入れをします。3年ほど作物を栽培した後森に戻す循環型の農法です。アマゾンの土地は本来やせた土ですが、焼畑農業をしているところは燃えた草木からの栄養分を多く含み、「アマゾンの黒い土」といわれる肥えた土壌になっています。伝統的な焼畑は持続可能なのです。一方、森林破壊の主原因は、大規模な近代的牧場や畑を開拓することを目的とした森への放火や、無秩序な開発によるものです。森が火事になるとその後プランテーションや牧場にしてもよいことになっており、放火により森林火災が絶えない状況が続いています。また、近年の地球温暖化の影響で森の様子も10年以上前とは異なってきました。落ち葉などがよく乾燥して燃えやすくなり、放火の被害が大きくなったようです。商業的な大規模農業が問題であり、牛肉、鶏肉、大豆などの作物を輸入している日本人もアマゾンの破壊と無関係ではありません。

Q 2：オーストラリアの先住民アボリジニの成人の自殺率が高いことを新聞報道で知りました。

A 2：これは深刻な問題で、アボリジニだけの問題ではなく、他の地域の先住民族も同じ問題を抱えています。先住民族は狩猟・採集を生業とし、広い大地を自由に生きてきたのですが、後からきた入植者に土地を奪われ、保護区に押し込められて馴染のないライフスタイルを強要され、言葉や文化を奪われ、仮に学歴を身につけても、差別や抑圧された状況であることが多いのです。そのためこの状況から逃避するためにアルコール依存に陥ったり、自殺に追い込まれたりするのです。今日お話しした木村 敏先生の友人にジレックさんというドイツの精神科医がいます。彼はカナダの先住民族が抱えるこの問題について、先住民族の伝統的な儀礼を再生する中で、自分たちのライフスタイルの誇りと自信を取り戻し、結果的にメンタルヘルスの改善につながる、このような実践的な研究をされています。それと共に、アイヌを含めて先住民族から奪った土地や資源を返還し、そこで自由に生業を営めるようにすることも重要です。これは「先住権」の回復と言って、現に北海道のアイヌ民族もそれを目指して取り組んでいます。

【田中克先生コメント】

小田先生の今日のお話で、この講座のテーマである「森里海のつながり いのちの循環」の根源に関わる問題提起を沢山していただきました。本日のお話は、私が考えている「森里海連環学」はまだまだ底の浅いものということを改めて感じました。

小田先生は最後に一言「平和」ということを話されました。私はいのちの循環の根源は「水」と考えます。世界の争い、紛争が起っているところではほとんど全てが水不足に陥り、それは食料不足となって飢餓の状態に陥り、人々の分断を利用して強圧的為政者が国を支配することが世界各地に起こっています。森里海連環学を「平和」の視点から深めることの想いを持っておりましたが、本日はこのことに関わる根源的なお話しをしていただきました。同時にいろいろなことが網の目のように、物事の「あいだ」とか、私達の回りには見えないが大切なことが無限にあるが、現代社会ではその殆どを切り捨ててきました。

統合的な人類学を深めておられるのは、単なる知的興味ではなく、今日私たちが抱えた深刻な問題意識を解決する手がかりを得るためであると明言されました。それは「人新世」における科学や研究のありようを指摘されたものであり、この「地球環境自然学講座」が目指す学びを日々の行動変容につなげる方向とも通じるものと強く感じました。

本日は新型コロナウイルス・パンデミックの問題から始まり、未来世代のために考えるべきことを、具体的に、タイムリーにお話しいただきました。まことにありがとうございました。

(了)